

名古屋新潟県人会と上越

「ネット相談役」

太田四郎（本町五丁目出身）

名古屋新潟県人会は愛知県や隣接県に居住する新潟県出身者およびゆかりの人々によつて構成され、会員は現在約三百名ですが上越地区出身は約百名、中越は約八十名、下越は約一二〇名です。

一月の新年総会には二百名近く出席し、愛知県や新潟県庁ほかの来賓を迎え、お昼をはさん



県人会まつり

古屋ただだそうですが九月の全国県人会まつ
などで賑
やかに親
睦を深め
ています。

●高田の金城會

古學塾の多いので、全國に名を轟かした
新選組高田にて、飛出出身者及尾根に結
成する高田友朋會と云ふものがある。

県人会の創立は百年前の明治四十年前後と推定されますが、確たる資料が見当りませんので当時の地元新聞等を調べし、同感にての有力者なり

は数年前會を兼ね郷黨會をば本月七日の夜、同屋の料理店なる御茶座にて開會經々有難なる談話を交換したり、流石に一名古屋風の會合にて尚々方百も出で、一阿を笑はせた。又は得意の名古屋甚句で物を鳴らして高田幾幾を驚かす等々一同合せし能う人など左記の通りなり。又同故の爲め、三井物産、七半社、八半社、九半社、十半社、十一半社、十二半社、十三半社、十四半社、十五半社、十六半社、十七半社、十八半社、十九半社、二十半社、二十一半社、二十二半社、二十三半社、二十四半社、二十五半社、二十六半社、二十七半社、二十八半社、二十九半社、三十半社、三十一半社、三十二半社、三十三半社、三十四半社、三十五半社、三十六半社、三十七半社、三十八半社、三十九半社、四十半社、四十一半社、四十二半社、四十三半社、四十四半社、四十五半社、四十六半社、四十七半社、四十八半社、四十九半社、五十半社、五十一半社、五十二半社、五十三半社、五十四半社、五十五半社、五十六半社、五十七半社、五十八半社、五十九半社、六十半社、六十一半社、六十二半社、六十三半社、六十四半社、六十五半社、六十六半社、六十七半社、六十八半社、六十九半社、七十半社、七十一半社、七十二半社、七十三半社、七十四半社、七十五半社、七十六半社、七十七半社、七十八半社、七十九半社、八十半社、八十一半社、八十二半社、八十三半社、八十四半社、八十五半社、八十六半社、八十七半社、八十八半社、八十九半社、九十半社、九十一半社、九十二半社、九十三半社、九十四半社、九十五半社、九十六半社、九十七半社、九十八半社、九十九半社、一百半社、一百零一半社、一百零二半社、一百零三半社、一百零四半社、一百零五半社、一百零六半社、一百零七半社、一百零八半社、一百零九半社、一百一十半社、一百一十一半社、一百一十二半社、一百一十三半社、一百一十四半社、一百一十五半社、一百一十六半社、一百一十七半社、一百一十八半社、一百一十九半社、一百二十半社、一百二十一半社、一百二十二半社、一百二十三半社、一百二十四半社、一百二十五半社、一百二十六半社、一百二十七半社、一百二十八半社、一百二十九半社、一百三十半社、一百三十一半社、一百三十二半社、一百三十三半社、一百三十四半社、一百三十五半社、一百三十六半社、一百三十七半社、一百三十八半社、一百三十九半社、一百四十半社、一百四十一半社、一百四十二半社、一百四十三半社、一百四十四半社、一百四十五半社、一百四十六半社、一百四十七半社、一百四十八半社、一百四十九半社、一百五十半社、一百五十一半社、一百五十二半社、一百五十三半社、一百五十四半社、一百五十五半社、一百五十六半社、一百五十七半社、一百五十八半社、一百五十九半社、一百六十半社、一百六十一半社、一百六十二半社、一百六十三半社、一百六十四半社、一百六十五半社、一百六十六半社、一百六十七半社、一百六十八半社、一百六十九半社、一百七十半社、一百七十一半社、一百七十二半社、一百七十三半社、一百七十四半社、一百七十五半社、一百七十六半社、一百七十七半社、一百七十八半社、一百七十九半社、一百八十半社、一百八十一半社、一百八十二半社、一百八十三半社、一百八十四半社、一百八十五半社、一百八十六半社、一百八十七半社、一百八十八半社、一百八十九半社、一百九十半社、一百九十一半社、一百九十二半社、一百九十三半社、一百九十四半社、一百九十五半社、一百九十六半社、一百九十七半社、一百九十八半社、一百九十九半社、二百半社、二百零一半社、二百零二半社、二百零三半社、二百零四半社、二百零五半社、二百零六半社、二百零七半社、二百零八半社、二百零九半社、二百一十半社、二百一十一半社、二百一十二半社、二百一十三半社、二百一十四半社、二百一十五半社、二百一十六半社、二百一十七半社、二百一十八半社、二百一十九半社、二百二十半社、二百二十一半社、二百二十二半社、二百二十三半社、二百二十四半社、二百二十五半社、二百二十六半社、二百二十七半社、二百二十八半社、二百二十九半社、二百三十半社、二百三十一半社、二百三十二半社、二百三十三半社、二百三十四半社、二百三十五半社、二百三十六半社、二百三十七半社、二百三十八半社、二百三十九半社、二百四十半社、二百四十一半社、二百四十二半社、二百四十三半社、二百四十四半社、二百四十五半社、二百四十六半社、二百四十七半社、二百四十八半社、二百四十九半社、二百五十半社、二百五十一半社、二百五十二半社、二百五十三半社、二百五十四半社、二百五十五半社、二百五十六半社、二百五十七半社、二百五十八半社、二百五十九半社、二百六十半社、二百六十一半社、二百六十二半社、二百六十三半社、二百六十四半社、二百六十五半社、二百六十六半社、二百六十七半社、二百六十八半社、二百六十九半社、二百七十半社、二百七十一半社、二百七十二半社、二百七十三半社、二百七十四半社、二百七十五半社、二百七十六半社、二百七十七半社、二百七十八半社、二百七十九半社、二百八十半社、二百八十一半社、二百八十二半社、二百八十三半社、二百八十四半社、二百八十五半社、二百八十六半社、二百八十七半社、二百八十八半社、二百八十九半社、二百九十半社、二百九十一半社、二百九十二半社、二百九十三半社、二百九十四半社、二百九十五半社、二百九十六半社、二百九十七半社、二百九十八半社、二百九十九半社、三百半社、三百零一半社、三百零二半社、三百零三半社、三百零四半社、三百零五半社、三百零六半社、三百零七半社、三百零八半社、三百零九半社、三百一十半社、三百一十一半社、三百一十二半社、三百一十三半社、三百一十四半社、三百一十五半社、三百一十六半社、三百一十七半社、三百一十八半社、三百一十九半社、三百二十半社、三百二十一半社、三百二十二半社、三百二十三半社、三百二十四半社、三百二十五半社、三百二十六半社、三百二十七半社、三百二十八半社、三百二十九半社、三百三十半社、三百三十一半社、三百三十二半社、三百三十三半社、三百三十四半社、三百三十五半社、三百三十六半社、三百三十七半社、三百三十八半社、三百三十九半社、三百四十半社、三百四十一半社、三百四十二半社、三百四十三半社、三百四十四半社、三百四十五半社、三百四十六半社、三百四十七半社、三百四十八半社、三百四十九半社、三百五十半

○高田の赤湯大會　来る十一日午前十時より
 塩釜に於ける同僚等集り約二十丁の場所へ會
 場を設けしに明治大倉を饗するが當日山兵士
 生共他者も遊子等參集して午前中は朝日山より
 眺望共相に垂るる千六百有餘丈の大落を拵め平地
 跡に至る午後數時遊樂を盡く遊後に同項目下
 の景観五六丁に及ぶ間の夔夔絶々に物なく遊來
 客に當りしは特に遠處にて相當の饗會を爲すべ
 かり上は特色ある當座隨手獲所に就て高水不
 合する方便利なるべしと

ている処です。

名古屋地区には北海道から沖縄まで各県の県人会が現在三十六ありますが夫々の創立時期は明治から戦後までいろいろです。明治四十年前後の地元新聞には、他県人会の総会など開催記事がまゝ見受けられます。当時は鉄道の発達とともに軍隊や工場、高等教育学校などの太平洋側への集中に伴い、地方からの人の移動交流が活発になり、各県の県人会、郷人会が発足し同県人が集まり親睦交流を深めたものと思われます。

しかし肝心の新潟県人会のルーツにつながるような記事が見ありませんが、明治四十四年一月十二日の名古屋新聞（現中日新聞）に尾張出身者（愛知県は名古屋以西の尾張と東の三河の国からなつてます）の金城会が高田の料理屋柳糸郷で一月七日に開催されたと云う記事がありました。丁度その日の二日前の一月五日にはオーストリーからレルヒ少佐が高田に到着し、

スキー発祥の第一歩が

信越大雪降る

汽車不通なる

です。金城会の席上レール比少佐について話題になったかどうか知る由もありませんが、名古屋の地元新聞にはレール比少佐の記事はどこにも見当りません。当時とすればこれは当然のことだったのでしよう。



から高田は「雪の高田」で有名だったのだと改めて思いました。

大分、本題から脱線いたし失礼しましたが県人会メンバーで上越関係の方で名古屋地方で特に有名だった方々を御紹介します。

松尾信資 元愛知県副知事

県人会の第五代と第八代会長で明治三十九年生、北魚沼郡入広瀬村（現魚沼市）出身加茂農林卒業、独学で中等教員免許をとり、昭和七年から十五年まで高田中学で歴史の教諭をされ、昭和十五年高等文官試験合格、内務省入り、昭和二十二年愛知県に勤務されました。戦後の愛知県発展の礎を築いた桑原県政のもとで副知事として愛知用水建設などの大プロジェクトを計画実施されました。

本山亨 元最高裁判事

県人会の第六代と第九代会長で大正六年生、大島村（現大島区）出身、民事専門の弁護士として開業、戦後のトヨタ自動車、大同製鋼をはじめ大企業の労働事件に会社側弁護士としてかゝわり、その面での名古屋の重鎮として名を成されました。お人柄により昭和四十一年名古屋弁護士会長、昭和五十二年から五十七年まで最高裁判事を勤められました。

昭和五十年前後の県人会副会長で大正初期の生、蒲川原村（現蒲川原区）出身、明治四十年創業の山本屋本店社長として煮込うどんの古里の味を都会の人に味わってもらうため、「この道一筋」に精進され、みその香り、手打うどんの歯ごたえで大好評を得、昭和三十三年以来市内に多くの店舗を出店し「みそ煮込みうどん」を名古屋名物に仕立てられました。

お三人ともすでに故人となられてますが、新潟の県民性で「口下手で不器用、ひたむきな堅実さ」「豪雪との闘いであくことのない粘り強さ」そして「頼まれれば江戸まで餅つきに行く」を地で行く方々でこちらの評判もよく、名古屋の方からなつかしげに思い出話をお聞きすることがあります。

ふるさとの先輩が誉められるのはまことに誇らしいことであり、すがすがしい思いが致します。



大正二年二月九日の新愛知（現中日新聞）に「高田の水滑大会」の見出しで二月十一日の全国スキー競技大会（日本スキー倶楽部主催）の予告記事がありました。

また二月十三日の記事によれば十日からの大雪で汽車が止まった由、名古屋でもやっぱり昔